#### こころの玉手箱歌手 水前寺清子（４） 三百六十五歩のマーチ

私の本名は林田民子。「小さな民子」から「チータ」になった。「涙を抱いた渡り鳥」でデビューするとき、芸名をどうしようかという話になった。





衣装もそれまでのイメージとは変えた（1980年の紅白歌合戦で着たもの）

　クラウンの伊藤正憲さんが少し考えて「水前寺清子はどうだ」と言った。水前寺は熊本市の有名な公園の名前。そして加藤清正から「清」の字をもらった。水前寺公園は子どものころよく遊んだ所だったから、そんな公園の名を芸名にするのはくすぐったかった。

　次に衣装のことになった。「演歌の竜」の異名を持つ伝説のプロデューサー、馬渕玄三さんは「袴（はかま）をはけ」と言う。この歌は袴姿がトレードマークの畠山みどりさんが歌うはずだったし、人気絶頂だった畠山さんに対抗する意味もあったようだ。でも私は即座に「いやです」と返した。

　私は子どものころから東映時代劇の大川橋蔵さんのファンだった。「橋蔵さんみたいな着流しで歌いたいです」。私の望みはかなえられ、それからずっと着流し姿で歌うことになる。つまり日本調の男歌が私の定番になった。

　ところが22歳のとき「三百六十五歩のマーチ」の企画が届き、私を驚かせた。演歌でも歌謡曲でもなくマーチ。レコードジャケットの撮影では、おもちゃの兵隊みたいな帽子と上着にミニスカートにブーツ。バトンまで持つのだという。

　100万枚を突破した「いっぽんどっこの唄」をはじめ、レコードを出せば売れていた。いまさらイメージチェンジをする必要なんてあるの？　「作詞の星野先生、作曲の米山正夫先生は私をからかっているんじゃないか」と思った。

　でも詞をよく読むうちに心が静まってきた。「しあわせは　歩いてこない」「しあわせの　扉はせまい」「休まないで　歩け」。詞の一言一言が私を励ましているようだった。

　そして「僕だってこれまでも、いまも、これからも、毎日一歩一歩足を踏みしめて生きているんだ」という星野先生のつぶやきが聞こえる。

　吹っ切れた私は元気良く「ワン・ツー・ワン・ツー」と歌い、1969年の選抜高校野球大会の入場行進曲に採用された。